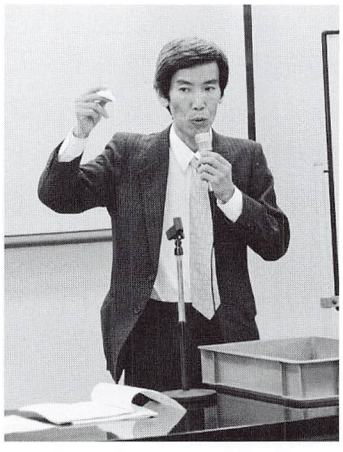
平成19年度さきたま講座『考古学で学ぶ動物とのかかわり』

「縄文時代の動物を考古学する」

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　新屋　雅明 氏



埼玉県内の縄文時代の遺跡から発見される動物関連資料について紹介・解説を行った。動物関連資料の中には、動物考古学の対象となる動物遺存体や骨角貝を素材として作られた道具類のほかに、土器・土製品など縄文人の造形として動物が表現された資料がある。

動物遺存体については、県内の貝塚、洞穴遺跡から現在までに少なからぬ資料が報告・集成されている。こうした２次資料（埼玉県1987・埼玉県1993・埼玉県立博物館1994・埼玉県埋蔵文化財調査事業団1999・埼葛地区文化財担当者会2007）をもとに、主要遺跡出土の動物遺存体一覧を作成し、縄文人が食料として獲得していた貝類・魚類・鳥類・哺乳類等にはどのようなものがあるのかを紹介した。

動物考古学では種の同定だけでなく量の把握、採集の季節性の課題、家畜化の問題など研究の深化がはかられているのに対し、成果の表層的な紹介にすぎないが、一覧に登場する動物について、図鑑類を参照しながら我々の食卓と比較し、縄文時代の食生活・環境等について考えた。埼玉県域には縄文時代前期をピークとする海進に伴って、奥東京湾と呼ばれる海が入り込み県東部を中心に貝塚が形成されており、地図をもとに解説した。

動物遺存体のうち貝類については貝塚出土の実物資料を見ながら解説した。県内の貝塚から出土する貝類は河口の汽水域、内湾の干潟・泥底・砂底・岩礁に生息するものが多数を占めている。生息域の詳細は省略するがヤマトシジミ、アサリ、マガキ、ハイガイ、アカニシなどが多数を占める種であり、貝塚によって出土する種類に違いが見られる。これは貝を採取する海の環境の違いに起因している。例えばハイガイは内湾の干潟を生息域としており、干潟が減少した現在では少なくなった赤貝の一種である。我々の食卓にはなじみが薄いが、縄文時代の貝塚から多数出土することから、干潟の環境が少なからずあったことがわかる。哺乳類はイノシシ、シカが圧倒的に多く、他にイヌ、ノウサギ、タヌキ、アナグマ、イタチ、クジラ、爬虫類ではウミガメ・アオウミガメが出土する。また魚類は種類が豊富でボラ・スズキ・クロダイをはじめ多種にわたっている。

貝塚以外では秩父地域の洞穴遺跡から動物遺存体の出土がある。妙音寺洞穴では淡水の砂泥底に生息するカワニナをはじめとする貝類、ギバチ・ツグイなどの魚類、各種の哺乳類・両生類・爬虫類が出土している。また、海産のハチジョウダカラ、イモガイ、ハイガイが出土しており、縄文時代早期という時期に遠隔地から入手していた点で特筆される（埼玉県埋蔵文化財調査事業団1999）。

また、縄文人は動物の骨角貝を素材とした刺突具・鏃・釣針・針・ヘラ・貝刃・貝輪・垂飾などを製作・使用している。県内の出土例は少数であるが、他県のものもまじえながら皆野町妙音寺洞穴出土資料などを紹介した。

動物遺存体・骨角貝器と並ぶもうひとつの主題は縄文人の造形に登場する動物である。

縄文土器には獣面を突起や文様として付けたものがある。イノシシと思われるものは中部・関東の縄文時代前期末から中期にかけて類例が多い。後期の例は少ないが富山県井口遺跡では注口土器の類例が知られている。第１図の堂山公園遺跡例は前期末の諸磯ｂ式であり、この時期の類例が最も多い。縄文時代中期にはヘビを表現した装飾を付した土器がある。ヘビは日本では家の守り神、神の化身として扱われており、縄文人もしばしば土器の装飾として用いている。県内では他に羽沢

遺跡の獣面把手付土器が知られている（第１図）。大きな目、垂れ下がった鼻と鼻腔、ピンと立った小さな耳、平たく大きな尻尾が表現されており、ムササビをかたどったものと考えられる。

縄文時代の動物形土製品にはイノシシ、イヌ、クマ、サル、巻き貝などのほか、後述する中空の動物形土製品がある。

土器装飾と同様にイノシシの類例は多く、動物遺存体としてはイノシシに並んで多く出土するシカが少ないのとは対照的である。県内では吉見町三ノ耕地遺跡の縄文時代晩期の水場遺構からイノシシと思しき土製品が出土している（文化庁編1999）。イヌあるいはオオカミと思われる土製品の県内の資料として越生町南原遺跡例（第１図）がある。縄文時代後期前葉の可能性が高いと考えられている（梅沢1979）。

筆者らが調査・報告を担当した蓮田市久台遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2007）から出土した中空の動物形土製品は県内ではさいたま市（旧大宮市）東北原遺跡例（大宮市遺跡調査会1985）に次ぐ２例目の発見となった（第１図）。久台遺跡の動物形土製品は長さ15.5cm。長さ24.7cmの東北原遺跡例に比べて小型である。頭部・脚部を欠損する。腹部には円孔がある。体部には三叉文をはじめとする沈線文様によって区切られた区画に縄文を施している。

この種の中空の土製品は縄文時代晩期の東日本を中心に出土している。中空土製品に動物的な表現があるものはそれぞれ海獣、ゲンゴロウ、亀、鳥などに見える。先にふれた土器の動物表現装飾・動物形土製品にはモデルがあり、我々のイノシシ、イヌ、クマ、サルといった断定に妥当性があるように思える資料が少なくない。しかし中空の動物形土製品については縄文人の抽象的な造形にはばまれて躊躇してしまう。

講演ではモデル探しを離れ、中空の動物形土製品やそれ以外の祭祀用具の出土状況についてふれ、遺跡からこれらがどのように出土するのかを紹介した。

中空の動物形土製品が出土した蓮田市久台遺跡は大宮台地の北東部に位置しており、縄文時代後期前葉の集落、後期後葉から晩期の集落が調査されている。動物形土製品は後期後葉から晩期の集落内にある第４号住居跡の床面近くの壁際から見つかっている。やや離れた位置から出土した浅鉢形土器とともに晩期初頭の安行３ａ式である。

東北原遺跡の動物形土製品は久台遺跡例より時期的に後続する段階と考えられるが、出土状況は久台遺跡と共通するものがあり、やはり竪穴住居跡の壁際・床面からの出土である。

動物形土製品の出土状況については土肥孝氏も注目されており、合掌土偶の出土状況と比較されている（土肥2006）。住居跡床面・壁際からの出土状況から想起されるのは後期中葉から後葉の異形台付土器である。異形台付土器とは関東の後期中葉から晩期初頭にかけて作られた器種で、その形態から香炉と推測され、祭祀用具と考えられる。床面・壁際からの後期の出土例として千葉市加曽利北貝塚などがある。異形台付土器の香炉としての機能は晩期に入ると脚付香炉形土器、柄香炉形土製品（堀越2004）に引き継がれる。床面・壁際からの出土事例は市原市菊間手永遺跡などで知られており、後期以来の扱いが継承されていることをうかがわせる。

中空の動物形土製品が作られた縄文時代晩期前半は土偶・香炉・石剣などそのほかの祭祀用具も数の多さではピークを迎える。こうした祭祀用具は住居跡の床面・壁際から出土する場合が少なからずある。むろん住居跡以外からの出土もあり、住居外に祭祀用具が集中する地点が見つかった遺跡もある。これらは祭祀用具が生活用具とは異なる経緯で終焉を迎えたことの反映である。その検討を通じ、縄文人の動物形土製品を含めた祭祀がどのようなものだったかを推測する契機になると考えている。

引用参考文献

梅沢太久夫　1979「動物形土製品－埼玉県入間郡越生町南原遺跡出土資料の紹介－」『埼玉考古』18

大宮市遺跡調査会　1985『東北原遺跡－第６次調査－』

富士見市教育委員会　1985『富士見市遺跡群Ⅲ』

埼玉県　1987『荒川　人文Ⅰ－荒川総合調査報告書２－』

埼玉県　1993『中川水系Ⅲ人文　中川水系総合調査報告書２』

埼玉県立博物館　1994『神庭洞窟』

埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1995『堂山公園／久台』

埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1999『妙音寺／妙音寺洞穴』

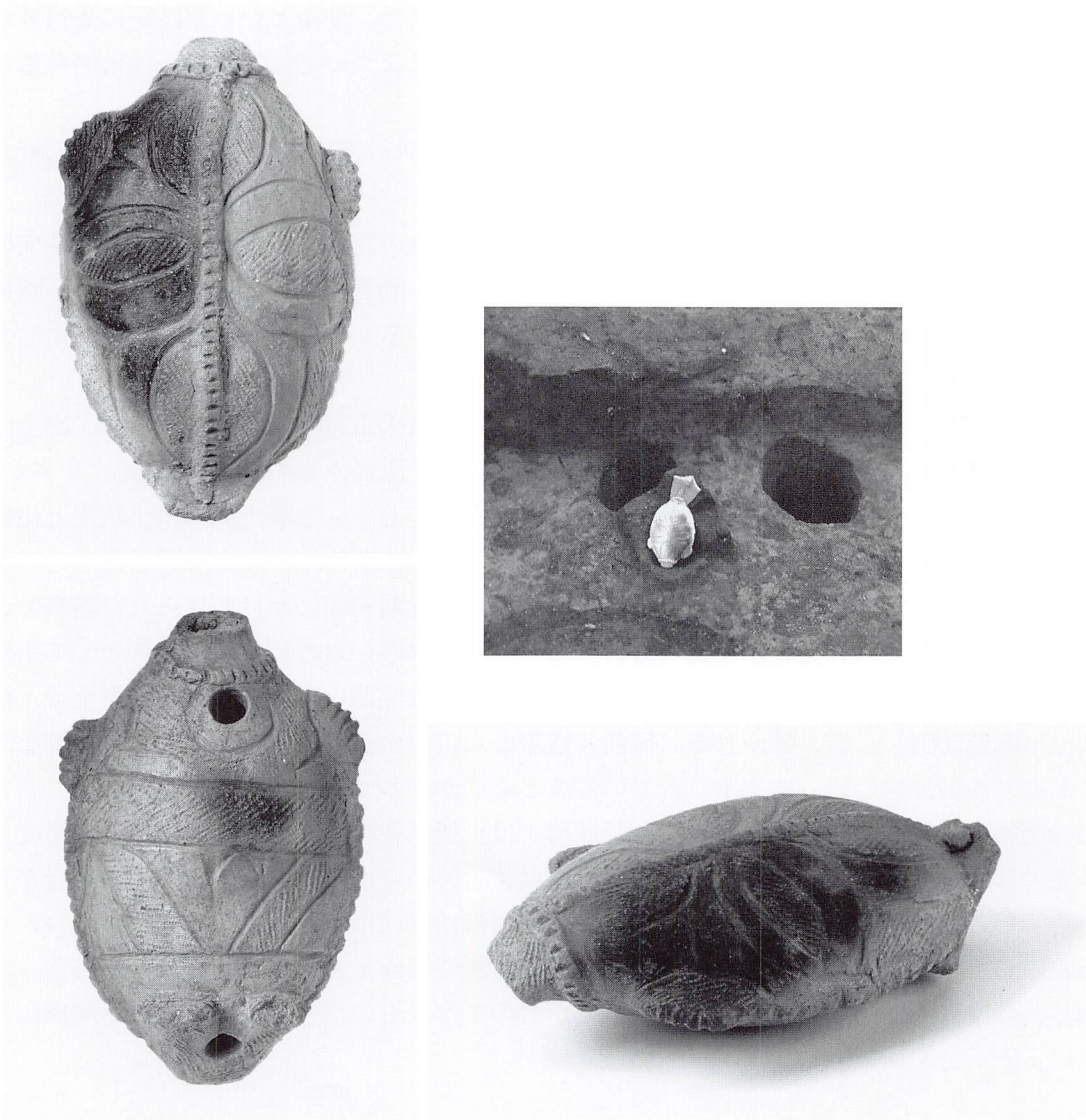
文化庁編　1999『発掘された日本列島99　新発見考古速報』

堀越正行　2004「柄香炉形土製品の提唱」『史館』33

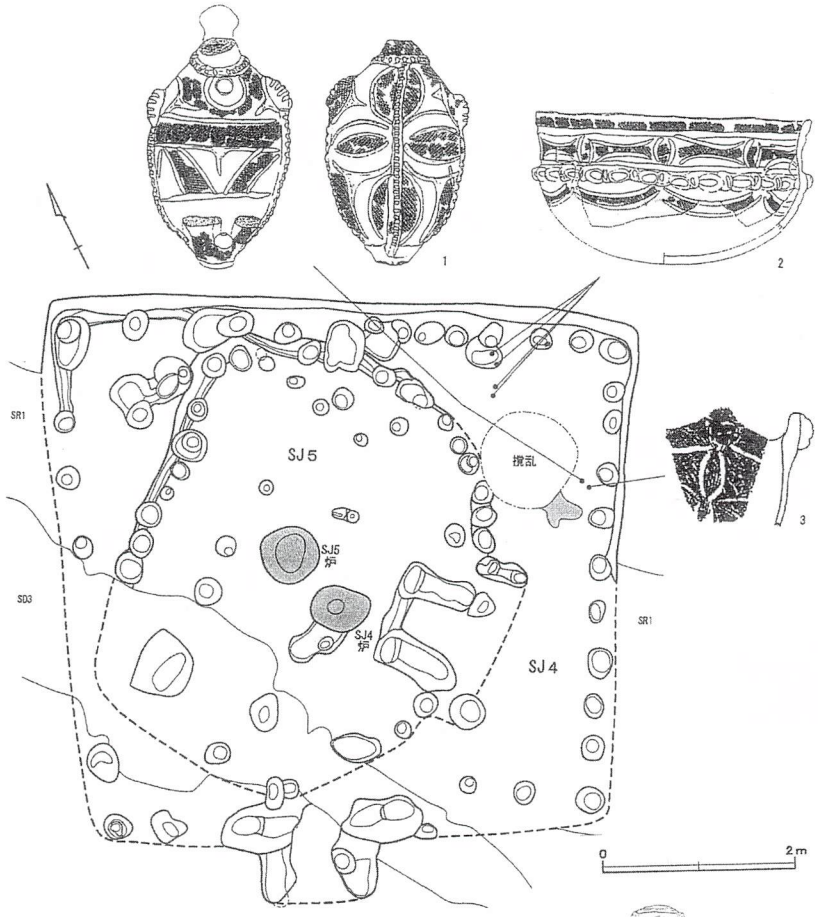
土肥　孝　2006「さいたま市東北原遺跡出土の動物形土製品について－動物形土製品への視点－」『埼玉の考古学Ⅱ』

埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2007『久台遺跡Ⅲ』

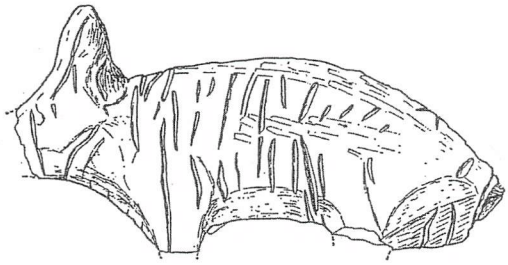
埼葛地区文化財担当者会　2007『埼葛の遺跡』



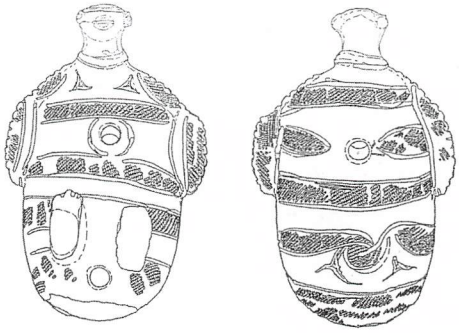
久台遺跡の動物型土製品とその出土状況



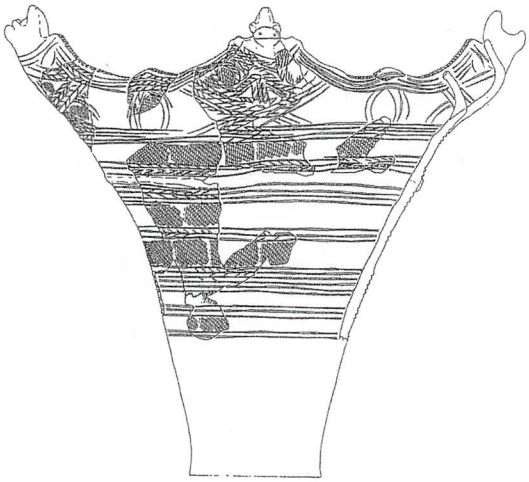
久台遺跡出土動物形土製品とその出土状況



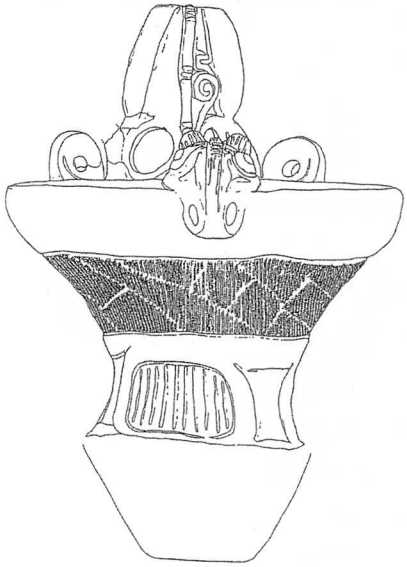
南原遺跡出土動物形土製品(縮尺1／1)



東北原遺跡出土動物形土製品(縮尺1／6)



堂山公園遺跡出土縄文土器(縮尺 1／6)



羽沢遺跡出土縄文土器(縮尺 1／6)

第１図　久台遺跡 動物形土製品の出土状況と関連資料